

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	京都教育大学附属桃山小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	社会とのつながりから思いをめぐらし自己の課題を追究する子の育成

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 研究主題について

本研究は、学校教育目標の実現を目指し、特に総合的な学習の時間において、子ども自身が教科を生活、社会の中に関連づけ、想像を広げながら自らの課題を追究し、想像力を発揮する集団としての共生の姿を目指すものである。さらに、学校教育活動の様々な場面において子どもたちのエージェンシーが発揮されることを期待し、「社会とのつながりから思いをめぐらし、自己の課題を追究する子の育成—エージェンシーを育む学習課題と評価—」と研究主題を定めた。ここでの「社会とのつながり」とは、実社会とのつながりを明確にしたものであり、学校と生活・社会との接続を意識する子どもの姿を目指している。

「思いをめぐらす」とは、であったこと・もの・人に対して想像力を働かす姿であり、事象に対して注意力を発揮できる姿であり、「自己の課題」とは、想像力を発揮した結果として問題を発見し、それを自分ごととして課題を設定する力を目指している。（教科学習では、設定された課題に対して「自分ごと」として取り組むこと想定している。）そして、「追究する」とは、課題を解決するだけに留まらず、更なる課題を見出して問題の解決に向かい続ける力、主体となる力の育成を目指すものであり、その力の持続のための自己理解や他者理解・共感の能力の育成も求めるものである。本研究主題の達成のためには、教科学習での「使える」レベルの学力の育成と、育成された「使える」レベルの学力が総合的な学習の時間で往還する姿を目指す必要があると考えた。

2. エージェンシーを育む学習課題と評価について

研究主題にあるように、実際の生活や社会の文脈を意識した学習を目指すことによって、私たちは、エージェンシーが育まれていくと考える。エージェンシーは他者や社会との関係性の中で育まれるものであり、自分だけの考えではなく、他者との相互の関わりの中で、意思決定や行動を決めるものであることから、「社会とのつながりから思いをめぐらし、自己の課題を追究する子」の姿は、エージェンシーを発揮しながら学ぶ子の姿であるとも言える。

では、教科と生活・総合的な学習において、エージェンシーはどのように育まれていくのだろうか。溝上（2018）は、主体的な学習（agentic learning）を「行為者が課題にすすんで働きかけて取り組まれる学習のこと」と定義した。ここでいう主体的は「行為主体性（agency）」を指している。

この定義に基づいて①課題依存型の主体的な学習、②自己調整型の主体的な学習、そして、アイデンティティの形成やウェルビーイングを目指して課題に取り組む③人生型の主体的な学習という三層からなる主体的な学習のスペクトラムを提案している。

本研究においては、たとえ教師から与えられる課題であったとしても、子どもたちにとってより魅力的な「学習課題」となるような課題を設定すること、自己調整へとつなげるために、子どもと共に目標を設定したり、評価について考えたりしていくことを目指すことが大切であると考え研究を進めてきた。

「教科する」授業によって、実際の生活や社会の文脈の中を意識した「真正の学習」を目指し、③人生型

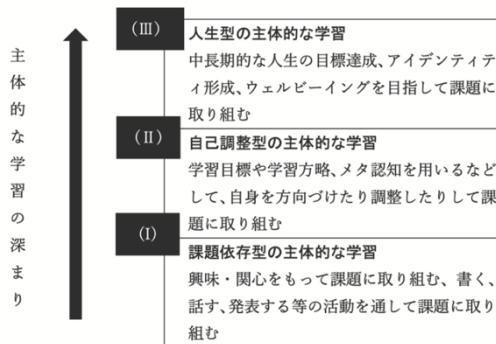


図3 三層からなる主体的な学習のスペクトラム（溝上 2018）

の主体的な学習へとつないでいくために「教科」と「総合的な学習」の往還を意識しながら学びをつくっていくことでエージェンシーが発揮され、カリキュラム全体でエージェンシーを育てていくことにつながる。

また、子どもたちがエージェンシーを発揮しながら学ぶ際に、自らの学びを導く「学びの羅針盤」となるラーニング・コンパスの知識とは、教科の知識を含む4つの知識に分類され、それらが相互に作用しあう機会を繰り返していくことで、より深い知識やスキルが身に付いていくとされている。さらに、すべての知識の基盤となる教科の知識は、キー・コンセプトやビック・アイデアなどの形で、各学問分野においてどのような考え方をするのかということを中心とし、カリキュラム全体を通して、さまざまな学問的アプローチの方法を身に付けることを期待されている。

キー・コンセプトやビック・アイデアについては、必ずしも確立した定義はないとされていますが、本研究では、ウィギンス&マクタイ(2012)による「バラバラであった知識の点をつなぐことを可能にするもの」をビック・アイデアとし、それらを端的に記したものとする。ビック・アイデアは転移可能なものであるから、トピックやスキルを関連づけるのを助けてくれる。それゆえ、子どもたちの学びの楔となるアイデアを軸とし、永続的な理解とその本質的な問いを整理しながら単元を構想し、子どもたちとともに学びを創っていくことは、「教科」と「総合的な学習」の往還を実現していくことにつながると考える。

3. 校内研究の実施内容について

5月25日	教科学習研修	講師：山本はるか先生
6月22日	生活・総合学習研修	講師：黒上晴夫先生
8月29日	パフォーマンス課題検討会	講師：山本はるか先生
10月18日	校内授業研究会 4年総合的な学習の時間「みんなにとって居心地のよい町づくり」	講師：黒上晴夫先生
10月20日	校内授業研究会 2年算数「分数」	講師：山本はるか先生
11月2日	校内授業研究会 5年社会「わたしたちの生活と工業生産-自動車をつくる工業-」	講師：山本はるか先生
11月10日	校内授業研究会 3年理科「電気の通り道」	講師：山本はるか先生
12月7日	校内授業研究会 6年総合的な学習の時間「世界から日本をみつめよう」 1年生活「あきをみつけよう」	講師：黒上晴夫先生

上記の他にも、京都教育大学の各教科の専門教員から助言を受ける校内授業研究会を実施し、実践を積み重ねてきた。

10月23日	3年総合的な学習の時間「桃小のあるまち」
11月8日	校内授業研究会 6年国語「『鳥獣戯画』を読む」
11月9日	校内授業研究会 5年総合的な学習の時間「京都の伝統文化を探ろう」
11月22日	校内授業研究会 1年国語「『おかゆのおなべ』を読む」
12月13日	校内授業研究会 4年音楽「オーメストラの音色を意識して〈剣の舞〉を聴こう」

※詳細については、研究紀要を参照されたい。

なお、2月10日には、筑波大学附属小学校の学習公開・初等教育研修会の総合的な学習の時間の提案授業を参観し、STEMを取り入れた「総合」について学んだ。

そして、2月22日に教育実践研究発表会を行い、全国から約250名が参会された。教科及び総合的な学習の時間の授業提案を行い、黒上晴夫先生から「総合的な学習の充実をめざして」と、山本はるか先生から「パフォーマンス評価で主体性は育まれるかーエージェンシーとのつながりで考えるー」のご講演をいただいた。